

KSKS

No. 120

22. 8. 28

# ゆいゆい通信



編集人 社会福祉法人 寧楽ゆいの会  
〒631-0823 奈良市西大寺国見町3-5-5  
TEL/FAX 0742-41-6039  
URL <http://narayuinokai.or.jp>

定価 1部50円  
年間 300円

## ◆法人からの報告

「寄る辺のない個 社会全体の課題に」  
理事 田岡 めぐみ … 1

## ◆Reports

◇法人職員研修 … 2  
◇天理医療大学共同授業 … 3

## ◆Reports

さわやぎ／ぼすと … 4  
きらく／歩っと地活 … 5  
こもれば生訓／こもれば地活 … 6  
こもれば就労／D-PORT … 7  
ぐっとたいむ … 8

## ◆Thanks

後援会費納入者 … 8

## 「寄る辺のない個」社会全体の課題に

今年の夏、久しぶりに京都の祇園祭がありました。賑わいの様子やお囃子の「コンチキチン」という音に、ワクワク感がこちらにも伝わりました。同志が集まり、力を合わせて作り上げる様子はよいものです。元氣も湧いてきます。

コロナもまた拡大傾向になりました。いつまでウイズコロナの生活が続いていくのでしょうか。これからの社会はどのように変わるのかと不安になる中で、当たり前前に繰り返されてきた行事の意味に気づかされた思いです。

昔の人達は、「祭り」という形で集まる機会を設け、コミュニティーを作ってきたのだらうと感じました。現代では、頼れる者のいない「寄る辺のない個」をどのように社会が包摂していくかがこれからの社会の課題になるのではないかと、言われています。孤独や不安を抱える人たちへの支援が障がい者、高齢者、若者という区別なく、社会全体の課題になったのだと思いました。

(田岡めぐみ)



## 【法人の動き】

・監事監査が5月11、12日に行なわれました。指摘事項はありませんでした。

理事会と評議員会はコロナの状況を鑑みて書面評決としました。理事会は5月30日、評議員会は6月17日にそれぞれ決議されました。

・監事の嶋村好明さんが退任され、新たに越川友幸さんが選任されました。嶋村監事には、平成13年6月の法人設立当初からご尽力いただきました。長い間、本当にありがとうございました。

・法人組織、運営システムの見直しを行なっています。人事考課制度を取り入れ、職員等級や等級の定義、昇格要件、等級ごとの業務内容などを明確にし、安定した民主的な職場運営ができるように協議を進めています。

・育児・介護休業の法改正に伴う規定改訂について協議しました。

## Reports

### 元気になれる研修 をめざして

# 2022年度 第1回法人研修

今年度最初の法人職員研修を6月25日(土)に開催しました。感染対策を講じて行なった久しぶりの対面での研修です。今年度の方針にあげていた「メンタルヘルス」をテーマに1日を通して自分たちの実践を振り返り、今後の法人、事業所、ソーシャルワーカーとしてのあり方を考えました。

前半は、私たちの活動や実践の考え方の根底にある法人理念について、意見を交わし自分たちが目指す方向性の再確認や共有とその過程がメンタルヘルスに有用と考え、グループワークで行ないました。今自分が行なっている活動や実践を書き出し、それぞれが理念のどの部分に当てはまるのかを確認。そこから理念について確認したいこと、実践したいこと、理念に入れ込みたいことを書き出し、グループごとに意見交換した後、発表し全体で共有しました。

「『生活の質の向上』って具体的にはどうなること?」「『誰もが』安心して暮らせる街づくりって?」見慣れた法人理念も、じっくりひとつずつの言葉やその意味を考えると疑問が湧いてきます。また、「活動する地域についてもっと知りたい」「様々な分野とのネットワークづくりもできるんじゃない?」など実践したいこともたくさん出てきました。理念に入れ込みたいことでは、「利用者だけでなく職員も大切にという内容があったらいいな」「職員も安心して働ける環境を」という意見もありました。

理念が作られたのは20年前。精神障がい者が集える場も使えるサービスも多くはなかった頃です。当時を知るスタッフに状況やどのような意図で作られたのか、話を聞きながら、理念に書かれた言葉の意味を考え、自分たちが何を目指しているのかを再確認しました。他にも、私たちが大事にしている思いや実践、ゆいの会の存在と魅力をどのように発信していくか、という課題も出てきました。

### 社会福祉法人寧楽ゆいの会 理念

- ・地域で暮らす精神に障がいのある人の生活の質の向上を目指し、当事者、家族、ボランティア等と共に誰もが自分らしく安心して暮らせる街づくりを進めます。
- ・利用者は、それぞれに可能性を持った個人であり、それを最大限に生かすために「意思」と「希望」を尊重します。
- ・「意思」と「希望」を実現させるために、一人ひとりに必要な地域の資源を活用または、開拓します。

▶平成14年制定。今何を思う?

後半は、スタッフ各々が現在担当している業務を洗い出し、“アイゼンハワーマトリックス”を活用して各業務の優先順位の見直しを行ないました。アイゼンハワーマトリックスとは、作業や職務を緊急度と重要度で整理する手法で、最も重要な作業や職務を効果的に把握管理できます。それぞれ個人で業務整理をした後、グループで共有しました。業務の捉え方を見つめ直すだけでなく、たくさんある業務も優先順位を付けることで、気持ちに少し余裕を持って向き合えます。また、事業所ごとの役割や職務の違い、職員それぞれの思いを共有し、相互理解が深まりました。

この2年、会議も研修もリモートで行なってきたため、「対面でできて良かった」という感想が多く聞かれました。相手の表情や反応がよくわかり安心して話せる、タイムラグがなく話せるので活発な意見交換ができるなど、改めて直接会って話すことで実感、共有できることがあると感じました。思いを語ることで、それを受け止め共感してもらうことが明日からの業務への糧になります。今後も感染状況をみながらできるだけ対面での研修を実施していきたいと思います。(河部香澄)



▶ 久々の対面研修に少し緊張...

# 「語り」から学ぶ

## 天理医療大学 共同授業

天理医療大学では、毎年3回生の看護学生を対象に当事者の「語り」を聞く授業を行なっています。看護学部の岡本響子先生は「精神疾患は関係性の病いであり、投薬だけではすべてを解決することができない。学生の中には偏見を持っていたり、怖いという気持ちがある者もいる」と話します。看護師を目指す学生が当事者との対話を通して、精神障がい者への理解や自己理解を進めることを目的とした共同授業は今回で6回目を迎えます。学生74人、『ひまわり』『プロジェクトPeer』、社会福祉法人萌などから当事者18人、支援者4人が参加し、7月1日、8日、15日の3日間に渡り行なわれました。

### ○対話を通して

今回で3回目の参加のAさんは「自身の経験が誰かの役に立てば嬉しい。語ることで自分自身の励みになり元気になる」と参加を決めました。事前に自身の体験をスタッフとまとめるなど、学生さんのためにと入念に準備して授業に臨みます。

授業は当事者1人と学生4～5人で1グループ、各部屋に分かれて行ないます。1日目はAさんも学生も互いに緊張して、なかなかスムーズに対話が進みません。学生の提案のアイスブレイクのゲームで徐々に緊張が和らぎ「好きなこと」や「家族関係」などの対話が生まれ始めます。Aさんからも「難病になって精神的にしんどくなってしまっただけで、まさか自分がと思った」と過去の話が語られ始めました。2日目は対話を通してよりAさんへの理解が深まっています。「精神的にしんどくなり、そこで寧楽ゆいの会に通うようになり、仲間ができて元気になっていった。2回目の難病の手術も支えてくれる仲間がいたので乗り切ることができた。今はまた仕事をしたいと考えていて、それに向かって動き出している」とリカバリーストーリーが語られました。

最終日は各グループによる発表です。Aさんのグループは、リカバリーストーリーから『Aさん年表』を作って発表しました。年表には、音楽好きなAさんの人生の中で転機となったり勇気をもらったりした曲も入れていくという工夫もありました。

参加した学生からは「精神障がい者にはもっとネガティブなイメージがあった。話してみると明るく、質問にもしっかりと答えてくれた」「Aさんの『精神障がい者だからといって特別な目で見えてほしくない』という言葉にその通りだと感じた」「『入院中に看護師さんから温かい言葉をかけられ嬉しかった』と聞き、相手の心情やその背景を考えられる看護師を目指していきたい」と感想がありました。



### ○広がる当事者の活動

「最近の入院で身体拘束や保護室を体験した。当事者の辛い思いを知ってほしい。体験談を聞いてもらうことで、少しでも対応が変わるきっかけになれば嬉しい」「色々な経験や苦勞をしてきた人たちがいることを知ってほしい。優しさと思いやりを持ってもらうきっかけとなれば」参加した当事者から未来の看護師に向けたメッセージです。

今回の共同授業はコロナ禍にも関わらず、当事者の参加は過去最多となりました。奈良県でも『ひまわり』や『プロジェクトPeer』など、当事者が自身の体験や思いを語る土壌が広がり始めています。堂々と語るメンバーに頼もしさを感じるとともに、一人ひとりの体験の「語り」が仲間の役に立ち、自分自身を見つめ直すきっかけになるだけでなく、支援者をも育て、それが奈良県の精神保健福祉の向上にもつながっていくと実感しました。（宮崎涼真）

